

# 二〇一九年度 入学試験問題

## 国語

### 第一回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ものを理解するときには二つの側面があります。一つは、心地よい、軟らかい、おいしい、いい匂いにするなど、そのものが持つ性質を把握する定性的理解。もう一つは、何センチメートルか、何秒か、何アンペアかというように、どのぐらいの量のものであるかを把握する定量的理解です。この定量的理解のためのルールであり、ツールでもあるのが、単位というものです。

定量的な理解の方法にも、デジタルとアナログという二種類があります。歴史的に、定量的理解は、リングが1個、2個、3個、ヒツジが1頭、2頭、3頭というように、身近なものの数を数えることからスタートしたと行ってよいでしょう。このように数を数えることで量を把握するのは、デジタル的な理解の方法です。

アナログ的な理解の方法は、何らかの基準をつくり、その基準をもとに、その2倍、その4倍というように量を把握する方法です。長さなら手の大きさや足の大きさなどをもとに、その何個分であるかを測っていく方法が、洋の東西を問わず歴史的によく用いられていました。これを身体尺といいます。たとえば西洋では古くから「キュービット」という単位が使われてきました。1キュービットはメートルに換算すると0・4572メートルで、これは人間の肘から中指の先までのあいだの長さに由来しています。肘から中指の先までの長さの2倍であれば2キュービット、3倍であれば3キュービットです。

定量的理解にはこのようにデジタルとアナログという二つの構造があり、単位は、この二つを組み合わせて定量的理解をするツールとして生まれ、進化してきたわけです。

いきなり単位が「進化する」と書きましたが、単位が進化するといわれても、ピンとこない人もいるかもしれません。単位は巻尺や定規のように実体を持つ道具ではない、ただの抽象的な基準です。しかし、そんな単位というものも、時代とともに

A 進化を続けているのです。本書はそのような単位の進化をテーマとしていますが、本題に入る前に、まずは単位がどのように

タンジジョウしたかを考えてみたいと思います。長さ、質量、時間、電流、温度など、量にはそれぞれの個性があります。しかし、単位が生まれるきっかけはどれも同じ、「(3)」という二

ズがあつたということです。

たとえば長さを測りたいという欲求はとても身近なものです。土地を測量する、服をつくるために身体の寸法や布の長さを測るなど、何かをつくるときに必要になるのが長さという量であり、これを標準化（基準を決めること）しようと考えるのは必然的な流れでしょう。単位という基準があれば、何かをつくってもらうときに、いちいち同じ長さのものを見本として持っていなくても、「幅は1メートル、高さは50センチメートル」などと伝えることができます。

質量も、時間も、温度もそうでしょう。人とやりとりするものの量を計りたい、育てた家畜の体重を測りたい。どのぐらいの時間が過ぎたのか知りたい。どのぐらいの暑さなのか、熱さなのか知りたい。いずれも量を測りたいという人間の欲求がまずあり、測る決まりごととしての単位が生まれ、標準化されていく。そのような流れをたどって、今私たちが使っているような単位ができてきたわけです。

電気は比較的新しい量ですが、電気自体はもともと自然界にあるものです。金属などを触ったときに静電気がバチツとくるのは昔も今も変わりませんし、つるつるしたものをこするとホコリが、スイ付くことは古代ギリシャ時代から知られていました。18世紀にベンジャミン・フランクリンが雷雨の中で風を上げて実験したことで、初めて雷の正体が電気だと明らかになりましたが、雷自体ももともと自然界には存在していたものです。

ただ、古代ギリシャの哲学者タレスにしても（琥珀を磨いていたときに、摩擦でホコリが琥珀の表面に付くのを発見しました）、18世紀のフランクリンにしても、当時は電気の性質に驚いたり、雷の強弱などを感じたりすることはあつても、その量を測るといってハッソウはなかつたでしょう。感覚的にとらえるという点では、たとえば、私たちが味をとらえているのと同じようなものだったのではないかと思えます。

長さも温度も、もともとは感覚からスタートします。味というものも、私たちは薄味、しょっぱすぎる、など、感覚でざっくりととらえています。

そして味自体、ある程度測ることはできても、現代でもまだ単位化されておらず、量としては曖昧なままです。これは人間の味に対する理解がそこまで進んでいないということでもあります。

味を測定するソウチとしては、甘味、苦味、うま味、塩味、酸味という5項目のレーダーチャートで表す「味覚センサー」があります。個別の味

を計測する技術は、**B** あるわけですね。いずれ、甘味を出しているのはこの物質であり、この物質の量がこのときに甘味がいくつだという1対1の対応づけが、より科学的に実現する可能性があります。それができたときに、味という感覚についても、より限定して定量化できるようになるかもしれません。そうなるとそれが業界内で「**カンシユウ的**」に広がっていく、さまざまなメーカーが味覚センサーを開発するようになり、それぞれの機器によって測定結果が違ふということが起きてくると考えられます。そのとき、各社がどのような「**ベクトル**」を使い、どのような軸でどう量を表すかが異なっていれば混乱が生じるはずですよ。

そのような模索と混乱の過程を経て、あとになってから、実はそれが単位化できるものだったと気づく可能性があります。そうなったとき初めて、味の「量」を測れるようになり、味も統一された単位によって定量化できるようになるかもしれません。

19世紀には、**C** 電気も、そのように感覚的な、どこか謎めいたところのない量だと認識されていたのではないかと思います。それが次第に、照明が発明され、モールス信号などの通信ができるようになり、モーターを動かせるようになり……と電気を利用する技術が進んできたことで、電気は人間社会にとってとても役に立つということがわかってきます。そうすると、**D** 量を測りたい、測らなくてはいけない、というニーズが出てくるのです。

より明るい照明や、よりスムーズな通信技術をつくるには、電気の量を把握し、コントロールしなくてはなりません。もっとよく照らしたい、よりよい照明をつくって他社に勝ちたい。もっと速く、遠くに離れた家族にメッセージを伝えたい。単位はこのように、人間がそれを使って何かをしたいという思いを持つことから始まります。人間の意思や必要性からつくられ、<sup>(5)</sup> 制度化されていくのが単位というものなのです。

(安田正美『単位は進化する 究極の精度をめざして』)

★ツール……道具。

★ニーズ……必要性。

★ベクトル……大きさと向きを持つ量のこと。

65

70

75

80

85

90

問一

——(1)「**定性的理解**」とありますが、この例としてふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア わたしの家から学校までは直線距離でいえば六キロメートルある。  
イ 世界にたった一つしかないお気に入りのカバンはじょうぶで壊れない。  
ウ この料理をおいしく作るための砂糖の量は大きじ二はいである。

エ 渋滞していたためふだんより二十五分も多く時間がかかった。

問二

——(2)「単位は、この二つを組み合わせると定量的理解をするツールとして生まれ、進化してきたわけです。」とありますが、これより前の部分で筆者は、単位は何のために生まれたと述べていますか。解答らんに二行以内で説明しなさい。ただし、解答の中に「定量的理解」という言葉は使ってはいけません。

問三

**(3)** に入れるのにふさわしい言葉を本文中から六字で抜き出しなさい。

問四

——(4)「そして味自体、ある程度測ることはできても、現代でもまだ単位化されておらず、量としては曖昧なままです。」とありますが、曖昧ではなく味を測るためにはどのようなことが必要だと述べられていますか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「制度化」とありますが、本文中では何がどのようになっていることを意味していますか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問六

**A** **D** に当てはまる語を次のア〜エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)  
ア すでに    イ おそらく    ウ つねに    エ きちんと

問七

——(ア)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

## 問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の身体の部分を用いて数を数えたいという欲求が、やがて制度化され標準化されて私たちがいま使っている単位が生まれた。
  - イ 長さや、質量、時間、電流、温度などの単位は一見まったく別のもののように思えるが、実は同じ基準によってできている。
  - ウ 19世紀の人々が電気に対していただいていた感覚と、現在の人々の味に対するとらえ方との間には共通する点がある。
  - エ 単位が生まれるきっかけになったのは現代の人々が他人よりも便利で豊かな生活をしたと願う個人的な欲望であったといえる。
-



一際高い笛の音が、風に乗って聞こえてきて、子供たちの足が速くなる。今と違って、歩いて越える切通しは、子供の足には大変だった。うんと小さな子ならリヤカーに乗せてもらえるが、五つ六つともなると歩くのがあたり前だった。

切通しは日中でも暗く、一人ではとても怖ろしくて通れないが、お祭りの日はみんながいるから心強い。

フミちゃんにりっちゃん、りっちゃんのお姉さんとお母さん、しんちゃん……思い出せないが、他にもあと一人二人、一緒だったように思う。

切通しを下り出すと、遠くの裾野に斎場と出店が見えた。私たちはそこまでの疲れも忘れ、小走りになって裾野を目指した。息を切らせて一番手前の出店にたどり着くと、私たちは二、三人に分かれて

「A」と歩き出す。

村の人が圧倒的に多い中、B 近隣の村からも人が来ていて、出店と同じく、C 物珍しい。私たちは D と、楽しみに、いつもと違う村に心をときめかせた。

あの時、私は美樹と同じ五つ……いや、六つだったか。お古だが、仕立て直してもらった着物を着ていてご機嫌だった。

紅葉が入った白茶色の着物に、赤い帯……

それは子供ながらの、★一張羅で、滅多に着る機会のないものだった。

(5)袖や裾の紅葉を見やると、ふふっと、つい忍び笑いが漏れる。

東京の親戚が送ってくれたとかで、りっちゃんはここでは珍しい洋装だったけれど、私は内心、紅葉の着物の方が勝っていると思っていた。

一番仲良しのフミちゃんは、柿色の着物を着ていた。着物は無地で地味だけれど、高松で買ったという蝶々の模様の手提げを持っていて、それがとても羨ましかったのを覚えている。

「見てー。カメがおるよー」

しんちゃんの声に、私たちは顔を見合わせる。

「カメだつて」

「カメ、見に行こう」

亀釣りは高いし、しんちゃんほど興味もないから、私たちは見るだけ。女の子の興味はもつばら、宝くじだ。中でも「宝石くじ」と呼ばれるくじは、子供だけでなく大人の女の人にも人気だった。

お金を払って、おじさんの持つ細くて長い紙の束から一枚引くと、「十一」とか「八十七」とか番号が書いてあって、番号に合った装飾品がもらえる

95

90

85

80

75

70

65

のだ。装飾品といっても、ほとんどは安いピン留めやらリボンやら。一等は籠甲の櫛や真珠のネックレスで、それらを引き当てた人はまだ見たことがない。が、稀に凝ったブローチを当てる人もいたりで、村の女性は皆、一度はここで運試しをしたことがある筈だ。

当時、一回、三銭だったか五銭だったか。

一つの店で使うには(6)いい値段だったように思う。こづかいの少ない子供には尚更だった。

それでも少ないこづかいから「★大枚をはたいて」、私とフミちゃんはくじを引いた。

あの時は確か二人とも、七、八十番台だった。

「ここから好きなものを選んでいいよ」

そう言われた一角にはこまごまと小さな装飾品がぎらぎら入っていて、今思えば大したものは無かったのだが、その頃の私たちには心躍るものばかりだった。

色とりどりの宝の山から、一つ一つ手に取っては、あれにしようか、これにしようかとひとしきりはしゃぐ。悩みに悩んだ末に、フミちゃんは蝶々のピン留め、私はピンクの花が二つついたリボンを選んだ。

本当は私も蝶々のピン留めが欲しかったのだけれど、それは一つしかなかったし、フミちゃんは蝶々の手提げを持っているのだから、と、子供ながらに遠慮したのだった。髪は既に母が結ってくれていたの、私はフミちゃんに手伝ってもらって、花のついたリボンをブレスレットのように手首に巻いた。

「さ、行こう」

「行こう」

顔を見合わせては笑い合い、手に手を取って、私たちは歩いた。

(知野みさき『鈴の神さま』)

★えらいそうたいぶり……大変ひさしぶり。

★気風……気性。

★姉御肌……親分のような女性。

★斎場……祭を行う場。

★いくばくか……少しばかりの。

★こんまい……小さい。

★一張羅……持っているなかで一番上等な着物。

★大枚をはたいて……たくさんのお金を払って。

120

115

110

105

100

問一 — (1) 「随分複雑な想い」とありますが、これはどのような気持ちですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二 — (2) 「フミちゃんはますます目を細める。」とありますが、この時のフミちゃんの思いとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美樹が幼い割には礼儀をわきまえていることを不自然だと感じている。

イ 幼い美樹が自己紹介をして礼をしたことをほほえましく思っている。

ウ 美樹が自分に注目を集めさせようとしていることを未熟だと思っている。

エ 自分のひ孫によく似た美樹の姿を見てほほえみ喜ばしく感じている。

問三 — (3) 「お金」とありますが、「金」を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 金に糸目をつけない

二 金を食う

三 金は天下の回り物

四 時は金なり

五 金持ちけんかせず

「意味」

ア 時間は大切なものでむだに使ってはならない。

イ 余裕のある人はつまらないことで争わない。

ウ 金銭は一人の所にとどまることはない。

エ おしげもなく金銭を使う。

オ 費用がかさむ。

問四 — (4) 「どこかほっとした気持ちになった。」とありますが、これはなぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五 — (5) 「袖や裾の紅葉を見やると、ふふっと、つい忍び笑いが漏れる。」とありますが、これはなぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

— (6) 「いい値段」とありますが、この意味としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 亀釣りに比べれば払っても無駄ではないと思われる値段。

イ 籠甲の櫛や真珠のネックレスが当たらなくても許せる値段。

ウ 子供が持っているお金としては決して安くはない値段。

エ 好きな装飾品を選べることを考えれば適当である値段。

問七

— (7) 「A」～「D」に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ちらほら

ウ きよろきよろ

イ のんびり

エ なんとなく

問八

— (8) 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「みっちゃん」は実に久しぶりにかつての同級生に祭りの場での出会い、はるか昔の祭りをあれこれ思い出してはなつかしく語り合った。

イ 美樹はかつて自分が幼かったころの祭りの思い出を次々に思い出し、祭りの様子がすっかり変わってしまったことをしみじみと感じるのだった。

ウ 仁美は久しぶりに再会した二人の老人が存分に語り合えるように気を利かせて、自ら子守役を買って出る気づかいを示している。

エ かつての祭りは村の一大行事であったので、ふだんとはちがって子どもたちも遠慮なく出店で買い物をするのが許されていた。

